

# リーニユ公とナポレオン

玉井通和

はじめに

リーニユ公（シャルルジョゼフ・ド・リーニユ）は、一八一四年のウィーン会議を「会議は踊る、されど進まず<sup>(1)</sup>」と評したとされる、南ネーデルラント（現ベルギー）出身の大貴族、軍人、作家である。

現ベルギー、モンス市に近いベロイユ城を居城とし、一七世紀にはすでにその名を知られていた大貴族の家に生まれた、この《バラ色のプリンス》<sup>(2)</sup>は、ヴェルサイユやウィーンやサンクトペテルブルグの宮廷に姿をあらわし、マリーアントワネットやヨーゼフ二世やエカテリーナ二世とふれあい、様々な形で当時の文学者や作家、すなわちヴォルテール、J・J・ルソー、カザノヴァ、ボーマルシェ、ゲーテ、スタール夫人と交渉を持った。そして、何よりその端正な風貌と優雅な振る舞い、とりわけ洗練されたフランス語によって、古き良き時代の《フランス的な調子

と性格▽(エイナル評)を誰よりも見事に表現した、フランス人以上にフランス人らしい人物として知られている。

しかし特にこの二〇年、このプリンスが書き残した(再発見されたものも含む)膨大な手記・回想録の整理がより進むにつれ、彼がたんに旧体制アンシャンレジームという△生きる喜び▽あふれる時代を、ドゥスールド・ヴィヴァル気のポきいた言葉モを振りまいて生き抜いた時代の寵児であるだけでなく、自己と他者を冷静に見つめ、エスプリあふれる的確な表現で真摯に記録した、一つの時代の貴重な証言者、普遍的な人間の真実に迫った作家の側面が次第に浮き彫りにされてきている。

ここではまさにこういった二一世紀初めの現在の文脈コンテクストの中で、△五つか六つの祖国▽を持つ、先駆的コスモポリタンヨーロッパ人、リーニユ公が見たナポレオン・ボナパルトを、特に彼の△頭の忠実な書記▽<sup>(3)</sup>であるペンで書き残したものを通して、時間の経過とともに追っていくこととしたい。

## 注

- (1) リーニユ公の遠縁の人物がその回想録で四〇年後に伝えたこの有名な言葉は、ただ会議に進捗がないのを「嘆いた」ものと一般には受け取られているが、しかし、原文にあたるだけでもそのニュアンスは異なる。ヨーロッパ中から王侯貴族や有力政治家がウィーンに集まっている、たしかに△会議は歩んでいない、踊っている▽、しかし歴史上△初めて楽しみの中で平和がもたらされる▽、△政治という布に宴会が一杯刺繍されている▽という一連の言葉からは、△この世紀で一番陽気な人物▽「ゲーテの詩、『この世紀で一番陽気な人物へのレクイエム』(一七一五)より」の面目躍如たる面、この会議をむしろ肯定的に評価している面が感じられるのである。(拙著『リーニユ公とその世界』序説(1)』、桜文論叢第八一巻、2011, p.26. 参照)
- (2) 「バラ色」は元々、(シャルルマーニユの血を引くとされる)古いリーニユ家代々に用いられた色であって、決してリーニユ公個人の色ではない、と彼自身が『回想録』の中で指摘している。

1.

一八〇三年七月、ナポレオン・ボナパルトがフランス共和国第一執政官としてブリュッセル入市の折、リーニュ公の次男ルイがこれを先導する名誉を得た。しかしリーニュ公は、 $\blacktriangleleft$ リーニュ一族がフランス執政官衛兵 $\blacktriangleright$ として行動していることに $\blacktriangleleft$ 憤慨 $\blacktriangleright$ する。

だが当時二三才の息子ルイにしてみれば、これは当然の成り行きだった。父親によつて一〇才の時王妃マリー・アントワネットの名を冠した竜騎兵部隊に登録されて以来、パリで教育を受けてきた彼は、革命戦争の混乱の中、最終に後のナポレオン軍の勇将ネイ元帥に拾われて曹長にされ、生と死の危機を幾度も乗り越えてここに至っていた。軍人ナポレオンの軍事的才能に対する信頼もあつて士気高い若手将校の一人であり、この三カ月前からオーストリア国籍を離れ、フランス国籍を得たばかりの「フランス共和国市民」でもあつた。<sup>(3)</sup>そして、母親のリーニュ公妃がひとり留守を守るベロイユ城他エノー地方の、フランスに接収されつつあつたリーニュ家の資産を取り戻すには一族の中で誰より良い位置にいたのも事実である。

リーニュ公自身は、一七九四年フロリュス（現ベルギー、シャルルロワ市近く）の戦いでオーストリア軍がフランス革命軍に敗れて以来、一八一四年の死に至るまでの晩年の二〇年をウィーン、またはボヘミアの保養地で、いわば亡命者として過ごし、再びベロイユ城、<sup>(4)</sup>そして自ら手掛けたその見事な庭園を目にすることは二度となかった。

ナポレオンがブリュッセルに入る二カ月前の一八〇三年五月には、一週間だけ彼はエーデルシュテッテン（ドイツ南西部）に与えられたリーニユ家の新領地に、最初で最後の訪問をしている。これはファニヨル（ベルギー、ナミュール地方）の領地放棄への代償であり、ナポレオンによる神聖ローマ帝国解体とその再編・再分配政策の流れの中での、いわば懐柔も意図された政策の一環であった。<sup>⑤</sup>しかしこの一年後には、はやくもおそらく経済的理由からこの領地は選帝侯投票権とともに、エステルハージー公（リーニユ公妃のハンガリーの従兄）に売却している。同じ頃ベロイユ城の接収は完了するが、リーニユ公はベロイユ城と他のエノー地方の自らの領地を息子ルイに譲ることでこれに対応している。

一八〇四年五月、フランス元老院がナポレオン・ボナパルトのナポレオン一世即位を宣言し、一二月にその戴冠式がローマ教皇ピウス七世出席のもとパリ、ノートルダム寺院で荘厳な雰囲気の中行なわれた。

ツーロン攻囲戦での功績で頭角を表わし、特にイタリア戦役での活躍が軍人としての名声を決定づけ、エジプト遠征という危機もその後のクーデタで乗り切り、そして圧倒的な国民的人気を背景に、共和国フランスを導く強力な指導者としての地位を不動のものとし、ここでその一つの頂点に上り詰めたのである。

ナポレオンより三四才年長のリーニユ公は、前述した通り各国の宮廷、社交界に名を馳せる古い大貴族出の著名な社交人だったが、本人は何より軍人である自分を意識していたと思われる。

軍人リーニユ公の経歴についての詳細は、自ら記録した『わが七年戦争従軍記 (*Mon Journal de la guerre de Sept Ans*)』を中心に近く論述を予定しているが、<sup>⑥</sup>九才の時からどんな時もペンを手放さなかった生涯の作家リーニユ公が、テュレンヌやコンデ公の活躍に胸躍らせ、一五才で初めてまとめた「処女作」が『軍人論 (*Discours sur la*

『profession des armes』だったのはそのことを何より雄弁に物語っている。職業軍人としての彼は、オーストリア皇帝軍将校として七年戦争で活躍し、一七八九年、対オスマントルコ戦でのベルグラード奪取にも重要な役割を果たしている。

こうしたリーニュ公からすれば、リーニュ家とリーニュ公個人の利害と感情を越え、息子ルイに劣らずナポレオンの軍人としての並はずれた活躍、生きた神話となりつつある<sup>オーグル</sup>▲コルシカの鬼<sup>▲</sup>の軍事行動に瞠目しても、何の不思議もないだろう。

#### 注

- (1) 最愛の息子、長男シャルルは、一七九二年北仏アルゴンヌでの対革命フランス軍戦にプロシャ・オーストリア連合軍の一員として参戦し、戦死している。
- (2) Ph.Mansel, *Le charmeur de l'Europe Charles-Joseph de Ligne(1713-1814)*, Stock, 1992, p.211.
- (3) J.Lambotte, *Le Prince de Ligne ou la dernière mémoire*, Labor, 1990, p.147. 以下参照。一八〇三年四月九日、フランス国籍取得。
- (4) 父祖の城、愛するペロイユ城については、一七八一年に『ペロイユ城一瞥 (Coup d'oeil sur Beloeil)』を刊行している。
- (5) 一八〇三年、神聖ローマ帝国の再編が決定されたのは、ミュンヘンの北のレーゲンスブルクにおいてであった。
- (6) これには執筆中の拙著『リーニュ公とその世界』の枠の中である。

## 2.

一八〇四年のフランス第一帝政とナポレオン一世の誕生、そしてその中心としての「帝国宮廷」の出現は、特にその権力の誇示の面で多くの人々を引き付けるが、同時に失望や反発も生んだ。自由と解放の英雄像を打ち砕かれたベートーヴェンが、その『第三交響曲(エロイカ)』のナポレオンへの献辞を取り消した話は良く知られている。文豪ゲーテもナポレオンを「軍馬に跨ったロベスピエール」とその冷たく強い独裁ぶりを評する。

ハプスブルグの宮廷の簡素さに慣れているものの、ブルボン朝のヴェルサイユの華麗さには異論のなかつたりニュー公も、さすがにナポレオンの宮廷の誇大な華美と虚飾をやり玉に挙げ、<sup>(1)</sup>「イタリアの殿様の悪趣味」だと酷評している。

だがもっと重要な問題はその領土的野心である。フィヒテはナポレオン一世占領下のベルリン大学で『ドイツ国民に告ぐ』という有名な講演をするが、リーニユ公はその三年以上前の一八〇四年八月、ドイツ人の祖国愛<sup>(2)</sup>に訴えかけ、プロシヤとオーストリアが反ナポレオンでもう一度共同戦線を張るべきだ、<sup>(3)</sup>「全ガリアと全イタリアの皇帝(ナポレオン)を、非シヤルルマーニユ化」すべきだと、当時プロシヤ駐在オーストリア大使としてベルリンに着任したばかりのメッテルニヒへの手紙の中で主張する。メッテルニヒは、オーストリア・プロシヤ同盟の再度の成立を画策するが、その努力は実を結ばない。

「王座にいるのは良き父、良き夫だが、良き王ではない」とリーニユ公は嘆いている。当時、王座を占めていたのは、フランツ二世、フリードリヒ・ウィルヘルム三世、アレクサンドル一世であり、マリア・テレジア、フリード

リヒ大王、エカテリーナ二世といった、良くも悪くも百戦錬磨の巨人たちと親しく交わってきたリーニュ公からすると、知性や良識は認められても、やはり役不足の感が否めないだろう。結局ナポレオンという新しい時代の巨人に対抗できる反ナポレオン同盟が成立するには九年を要するのである。

一八〇四年一〇月、フランツ二世はロシアのアレクサンドル一世と密約を交わしたとされるが、プロシヤが動いた形跡は見られない。リーニュ公の集めた情報によれば、要するにその意思がないのである。<sup>(4)</sup>そして、オーストリア皇帝フランツ二世に、六九才のリーニュ公は「オーストリアのために戦いたい」<sup>(4)</sup>、という請願書を提出する。これは、息子ルイがナポレオン軍将校として反オーストリア行動をしている事実があっただけでなく、彼自身が、オーストリア領ネーデルラント（現ベルギー）の愛国者の反オーストリア蜂起を支援しているという疑いをもたれ、謹慎を命じられたこと―実際に蜂起に関わっていないとしてもその祖国愛に共感したのは間違いないであろう―も背景にした、リーニュ公流の身の正し方であつたかもしれない。そして憤る。

しかし、ナポレオンが驚嘆すべき人間だと思ふのは非常識極まる。この戦いのエピソードは、名は伏せておくが、ある識者の言ったことにつきる。『これは貧相ならず者で、何もかも恐れているが、運だけは良い、そして我々がこれからひどい目にあわせてやる男だ。』<sup>(4)</sup>

年老いたとはいえ戦意を失っていない軍人が、目の前に迫る敵に対して発しそうな、率直な言葉であろう。しかし、様々な理由から戦争はないと冷静に判断していたリーニュ公の観測とは関係なく、一八〇五年一〇月二〇日ドイツ南

部のウルムでの会戦で、オーストリア軍はナポレオン軍に立ち向かう「破目」になり、いわばなすすべもなく敗北する。その一〇日後リーニユ公はウィーンに入り、十一月九日には娘フェフェを連れてプレスブルク（現ブラチスラバ）にいったん難を逃れる。その三日後には、ナポレオン軍がウィーンを占領し、ナポレオン自身はシェーンブルン宮殿に陣取る。

二カ月後のアウステルリッツの会戦にも、オーストリア軍は、ロシア軍の合流はあったものの、敗北を喫する。相次ぐ敗戦の報の中、リーニユ公は滞在地プレスブルクで、あるフランス軍兵士から聞いたという話を書き残している。それによれば、オーストリア軍の弱点は、戦場に火の手が上がるとただちに自らの意志でかけつける、主体性あるフランス軍と異なり、全体に旧態依然として動きが鈍く、上からの命令をあくまで守り続ける硬直した所にある<sup>(5)</sup>のである。

戦術・戦略に関心を示す軍人であるだけでなく、大きな時代の流れの十字路口に立つ意識からか、いわば先駆的ジャーナリストとして、一二月九日、リーニユ公はナポレオン占領下のウィーンに帰ってくる。

一八〇五年一二月一日に書き留めたのは（『回想録』ノート三〇収録）、その前日、高級将校や政治家からなるオーストリアの議員たちを前に、約一時間にわたってナポレオンが行なった会見の顛末である。リーニユ公によれば、偉大で崇高なもの<sup>(6)</sup>も凡庸で瑣末なものも<sup>(6)</sup>シャルルマーニュ、マホメット、カリオストロ<sup>(6)</sup>風なものも取り交ぜてあるこの会見の内容は、そこに同席した三人の最良の聞き手<sup>(6)</sup>から彼が聞き取り、つき合わせてまとめあげたものだという。

まずナポレオンは、出席した人々に向かって、その人々に課された重課税を遺憾に思う<sup>(6)</sup>が、しかし、それは自

分の軍の働きに報いるのに必要なのだと言う。

あなた方の皇帝がその金庫の資金であなた方を救うべきであろう。金で七千万あればあなた方は救われる。この私は、そういう金を好まない。私には財布も錢箱も土地も小作地もない。個人として持っているのは千ルイもな  
いと思う。国の金庫しか知らないし、それ以外知ろうとも思わない。<sup>(7)</sup>

そして、交渉を難航させているのは、<sup>(ルネ)</sup>変節漢<sup>(ガ)</sup>だったり、能力に欠ける臣下、取り巻きのせいだとオーストリア皇帝に同情し、そもそもこの<sup>(ルネ)</sup>不正で不幸な戦争<sup>(ガ)</sup>を決断した者は首をくくられるに値する、と付け加える。同時に皇帝その人にも触れ、不都合な側近や人と物事への無知は、生まれながらの君主たちの特徴である、自分もすべて知っている訳ではないが、

少なくとも人間について私が持っている多少の知識は、自分が一個人であつたこと、一兵卒から身を起して皇帝の地位にまで上り詰めたことに拠っている。<sup>(8)</sup>

《今私のいる部屋に肖像が掲げられている、あの偉大なマリア・テレジアは、帝国の重要な人物たちの意見を聞き、側に置いていた。》<sup>(ルネ)</sup>憲法が存在し、君主と民衆の間に中間権力がある体制なら別だが、今のこの状況下のオーストリアで、我々が<sup>(ルネ)</sup>地理的、軍事的保証<sup>(ガ)</sup>を得てただちに撤退するのは難しい。

自分ももうここに居るのは飽きたし、△みなパリに帰りたがっている、パリはずっと居心地がいいし、きれいな女性たちもいる。<sup>(8)</sup>▽

しかしとにかく、△現在すべては、私のものである。▽△不幸な事態に至っていたり、(ロシアとオーストリアの)同盟がもつとうまくいっていたとしても、私の方には国民衛兵、徴兵資格者、予備役がいなかっただろうか? そのすべてがライン川を越えていただろう。その数は二五万になっていただろう。しかし私にその必要はなかった。<sup>(9)</sup>▽

△ここにこうしていられることに驚いている。▽この平穏な状態の障害になりうるのはプロシヤだが、しかし彼らは△かつての彼らではない。歩兵隊はもはや同じではなく、砲兵隊はひどいものである。それは長い平和の結果である。▽

現在熱狂的な私の軍も一〇年後には、勝利を呼ぶ、その戦う精神を失うだろう。

従って戦わねばならないなら、まだ若い今の方が良い。三六才というのは良い年であり、六〇才で痛風病みになるのを待つつもりはない。<sup>(10)</sup>

こうした談話に加えて、その場に居合わせた人々からの質問、そしてやり取りがあり、ナポレオンは、熱を帯びてくると、たばこ入れを右手から左手へとますます激しく動かし、たばこを何度も吸いながら、話し続けたという。

この逸話が興味深いのは、一つはリーニユ公も指摘している通り、彼が様々な要素、公的なもの、極私的なもの、様々なレベルの話を混在させて話すことで、彼自身の性格をよく表わしているということによるが、もう一つは、そ

の戦争観である。

特に戦争というものの経済的側面が目につく。すなわち、兵士たちの戦意高揚を継続させるには、ただ祖国愛、パトリオティズム 名誉心、功名心の満足だけでなく、その経済的保証が必要である。そして、授けられるべき名誉や地位昇格のためにも、次々と戦場を変えながら戦争を継続していくのに必要な武器兵糧調達の継続のためにも、現地での戦利品、賠償金、「課税」は織り込み済みで必須だったのである。イタリア戦役を前に、ナポレオンが兵士に向けて行なったとされる演説にもその側面、戦いで得られるのが単に名誉だけではなく将来の「豊かな生活」でもあることが強調されているのが印象的であるが、それが特に一般の兵士たちをさらに鼓舞したのは明らかであろう。

古き良きアンシャンレジーム 旧体制の生き残り、リーニユ公がどのくらいこのことを理解していたか不明だが、中世からの伝統の騎士道精神や、太陽王ルイ一四世の栄光のための対外戦争と違った、新しい近代戦争の一面、つまり、革命と国を守る戦争、自由と解放の理念を広めるといふ大義の戦争ともすでに異なりつつある戦争の性格の一端が、一言で言えば、貴族的な戦争から「ブルジョワ的」とも言える戦争への転換の構図が、ナポレオンの言葉の端々に垣間見られるように思われるのである。

リーニユ公は、この会見を紹介した後、それに続けて次のように付け加えている。

私が議員だったら、この皇帝（ナポレオン）に次の二つのことを言っていたらどうだろう。

▲陛下、我らの帝国の栄光を完全には消すことなく、あなたの栄光を増してください。もし、極めて厳しい条件のもとでオーストリアがスイスやオランダのようにフランスの属州になり、その皇帝がデンマーク王のようにな

るなら、それはロシアに渡してしまうことになるのです。「∴」それから陛下、言わせて頂いてもよろしいでしょうか？もし、見たところと違って、破産し激昂した何百万もの人々に支えられ、絶望したオーストリアが∴<sup>11</sup>

講和条約締結に向けて、オーストリアへの寛大な政策と配慮、いわば融和策が、戦争を織り込んだ国際政治のメカニスムの中で、敗戦国オーストリアだけでなく戦勝国フランスにとつても有益だという主張であろう。

この△小さな偉大な男▽が馬車に乗り込むところをリーニユ公は見かけ、△その顔の下半分が快い▽と思う。また、不当に接収されたアーヘンの自分の館を口実に謁見を求めれば認められるに違いない、それは△フリードリヒ大王、ヴォルテール、エカテリーナ▽との対談に加えて、自分の『回想録』を飾るものになると想像したりもするが、人の評判を落とすのが好きな者の手にかかって明日の新聞のネタになるだけだとも思うのである。

翌一九日、かつてのヴェルサイユやパリのサロンでの旧知の仲、アベ・ド・ペリゴールとオーストリアの高官クラーク邸で食事をする。フランス革命の中、憲法制定議会で教会財産国有化を提案、ブルボン家ばかりかヴァチカンにも背き、ナポレオンに心酔して第一帝政の外務大臣のポストに就き、その没落後はルイ一八世にまたも外務大臣として仕えることになる、この元オータン司教こそタレーランであった。

そこに同席したクラークとタレーランはリーニユ公に、ナポレオンに会うのを勧める。△会いたいが、彼は何を言うのか？私は何を言うのか？人は何を言うのか？▽接収された館の話をすれば、と言う提案に、それはたいした話ではないと誇り高いリーニユ公が答えると、それが口実だと分かればかえって皇帝は喜ぶだろう、リーニユ公の△二〇才の時のようにフレッシュな想像力▽は△誰にも話しかけられない国▽<sup>13</sup>に滞在している皇帝の気に入らないわけがな

い、とタレーランが言う。クラークがシェーンブルン宮殿での謁見の設定を引き受けるが、結局一八〇五年一二月二六日に講和条約調印がすむと、皇帝は翌日にはもう出発してしまい、この話はなくなる。そして自分自身が感じていたことではないかと思われるが、リーニユ公は次のように書いている。

人々が言っている。▲何という男だ！あらゆる種類の魅力がある。我々は愛していないが、しかし、そこに敬服させられない言葉は一つもない。<sup>14</sup>▼

ナポレオンが去った後も、リーニユ公は友人チンツェンドルフが<sup>15</sup>単独で皇帝から聞き取ったという言葉を書き残している。たとえば、▲私がロシアと同盟したら▼プロシヤやオーストリアはどうなる、と言われるが、▲私はそれは望んでいない▼。あるいは、自分について▲あり得ない話がされている、狂っているとか、痩せていて病弱だとか、自殺するとか、長く生きられないとか▼、である。

ロシアは同盟するどころか、むしろ警戒すべき「野蛮な」国だというのは、タレーランも同じ認識であり、彼がオーストリアとの関係を重視するのは、それがロシアに対する防波堤としての中部ヨーロッパの良好な組織の要だと、これからを見据えて戦略的に考えるからであり、従って、一七五〇年代のショワズール公、ポンパドゥール夫人の時代以来伝統の、フランスとオーストリアの友好関係の継続を望んでいたからである。前述したリーニユ公の、穏当な条件での平和条約締結の意見は、<sup>16</sup>これに合致するものでもあったと言えよう。

## 注

- (1) Ligne, *Fragments de l'Histoire de ma vie*, 2vols. 1928, I, p.193.
- (2) フランス革命が生んだ祖<sup>パトリオティスム</sup>国愛という観念は、皮肉にもそのフランス軍の侵攻によってドイツに芽生えて根付いていき、フィヒテの演説を生むに至ることになる。
- (3) リーニユ公からメッテルニヒへの書簡、一八〇四年八月二八日付 (Ph.Mansel, *op.cit.*, p.216. に引用)。シャルルマーニュは、フランク王国の王で、その版図をフランスから中部ヨーロッパ、イタリアに広げ、八〇〇年、(西) ローマ皇帝の冠をローマ教皇から受けたことで知られている。
- (4) Prince Charles-Joseph de Ligne, *Fragments de l'histoire de ma vie*, t.1, H.Champion, 2000, p.275. 参照
- (5) Ligne, *Fragments...*, t.2, p.65. (Mansel, *op.cit.*, p.220. 参照)
- (6) 一八世紀後半有名だったイタリア人山<sup>アツァンチユリエ</sup>師 (二七四三―九五)
- (7) Prince Charles-Joseph de Ligne, *op.cit.*, H.Champion, 2000, p.281.
- (8) *Ibid.*, p.282.
- (9) *Ibid.*, p.283.
- (10) *Ibid.*
- (11) *Ibid.*, p.285.
- (12) *Ibid.*, p.286.
- (13) *Ibid.*
- (14) *Ibid.*, p.287.
- (15) 前述の「三人の聞き手」の一人である。
- (16) 本稿二二ページ参照。

遂に私は、何人も王位に就かせたり辞めさせたりしているこの人物を見た。<sup>(1)</sup>

ナポレオンに会い損ねてから一年半以上たった一八〇七年七月一七日、ドレスデンのザクセン王の宮廷で、リーニユ公はナポレオンをより近くから観察する機会を得る。ナポレオンは、七月八日にロシア・プロシヤと講和条約を結んだティルジットからパリに帰る途中の数日間、ドレスデンに滞在した。それにあわせてリーニユ公は、滞在地テプリッツ<sup>(3)</sup>から駆けつけたのであった。

リーニユ公は、ナポレオンを、ウィーンのサロンの人々やヴァチカン関係者のように「王権篡奪者<sup>(2)</sup>」と呼ぶことなく、その内政の絶対主義的政策と外での攻撃性を軸に、《大音楽家が楽器を操るように》人々を巧みに操った点から評価した、と評するむきもある。<sup>(4)</sup>しかしそれと同時に、自分の受けたその時の印象を、様々なニュアンスとともに事細かく書き残した観察眼、彼の特徴である作家の側面も注目すべきだと思われる。それがたとえば次の一八〇七年七月一七日の記録である。

リーニユ公がワイマル公と、多くの人々にまぎれて宮廷の階段の下にいと、皇帝が、その王位に就かせたザクセン王とゆつくり階段を昇っていった。<sup>(5)</sup>その《頭のでっぺんからつま先まで》じつくり観察し、その《端正な顔立ちと軍人らしい高貴さ》を認める。《その眼差しは毅然としていて、静かで、威厳がある。階段を昇りながら多くの重要なことを考えている様子で、それが、自然な感じのその表情に落ち着きを与えていた。》

しかし翌日、絵画ギャラリーでの、その《ウソ臭い人の良さを示す、わざとらしいほほ笑み》はリーニユ公の気に入らない。ナポレオンが彼らの方を振り返った時、隣の若い女性が言う。《何てやさしい、良い人みたいなのでしょ！》《マドモワゼル、羊みたいにおとなしいのですよ》、と彼は皮肉っぽく応じている。

皇帝の声はよくある声で、幾つかのその質問は、少し《とぎれとぎれな》言い方でなされた。おかしなことに歩く時の体の揺らし方がブルボン家の人々と同じだった。《フランス王（帝）位がそうさせるのか？わざとなのか？》

理由なく何もしない、何も言わない人間においては、そのすべてを注目すべきである。

その意味で私は、彼がカラヴァッジオ、ティツィアーノ、ルーベンスの前を軽く通りすぎ、戦いや歴史の場面の絵の前でこれ見よがしに立ち止るのに目を留めた。《これは自然なのか、演技なのか》、とそなたび私は言っていた。<sup>(5)</sup>

多くの人がナポレオンに近付く中、リーニユ公はひとり距離を置き、その《恵み》<sup>シヤリテ</sup>を求めない。《ナポレオンは上機嫌だった。ライン同盟に入る、どこか小さな国を私に与えていたかもしれない。》しかし、そうはしない。

それに、この帝国のモザイクはどのくらい続くだろうか？ひとつの落馬。すべて混乱状態に戻る。

ナポレオンに惹かれてはいるが、冷静なリアリストでもあるリーニユ公に、特にオーストリア帝国人の立場から、一

人の英雄によつて創られ三年しか経たない帝国なるものがこう見えても、それは不思議ではないであろう。

ナポレオンに近付かなかつた理由はもう一つある、と彼は続ける。それは彼について多くの冗談を言つたが、何でも知っている彼がそれを聞いていないはずがなく、▲ムッシュー、あなたはすぐ私を悪魔一世と呼ぶ、地震、悪魔Ⅱ人間、マホメット、カリオストロとも。▽などと言われたら困る、というのである。▲でも私にそんなことが言えただろうか？▽

かつて存在したもつとも驚嘆すべき人間に対する私の感嘆の気持を、彼は知らないのである。

しかし、この辺りは、どこまで本気なのか、あるいは軽い冗談なのか、本当のところは分からない。

はやくもこの三日後には、帰つてきたテプリッツから、当時ウィーン在住で、かつてフランス革命中ミラボーと親しく、王家を救おうと奔走したことで知られるアレンベルク公に手紙を書いている。その手紙の中では、ナポレオンに近付かなかつたということ以外に、そこに集められたライン連合の諸公に、ヨシヤバテの谷で最後の審判を待つているみたいだと言つたら、大笑いされたという、『回想録』で語つているのと同じエピソードが紹介されている。ただナポレオンについて異なつた面にふれる。

「…」彼は非常に軍人らしい、天才というより信念と計算の人、決して脱線しない印象です。フリートラントで

彼と共に戦ったザクセンのある大佐が私に語ったところによれば、砲火の下、鉛筆を手に、見通しの良い丘の上に立ち、その指令を紙に書いては部下に命じて將軍たちのところに持って行かせたといひます。ロシア軍の意図する動きをたちどころに見抜いて言いました。▲ああ！奴らが作戦行動を始めるつもりだ。戦術を与えるぞ。<sup>6</sup>▼

こうした戦術と戦略によつて生涯四〇の戦いに勝利したというナポレオンに比べ、リーニユ公自身その軍歴は、必ずしも本人の望んだようにならなかつたかもしれないが、しかし少なくとも、帝国親衛隊長に任じられたのに続き、一八〇八年、父親と同じく帝国陸軍元帥の地位に就任した。七三才になつた彼にとつてどちらもいわば名誉職ではあるが、本人は意気軒高であつた。皇帝に▲親衛隊長と元帥、ふたつもの指揮棒をどうする？▼と聞かれたリーニユ公は、即座に▲もし陛下が攻撃されましたら、ふたつとも捨てて銃を取ります▼、と答えたといひ<sup>7</sup>。

皇帝から遠ざけられ、宰相テュギュットに▲嫌な噛みつき屋▼と警戒されていたリーニユ公は、ヨーロッパ中にその名を知られた有名人であるだけでなく、宮廷で皇帝のすぐ側に控える寵臣となる。経済的にも余裕ができ、孫のベロイユ城相続が確実になり、後に回想録を書くことになるロザリー夫人という若い「恋人」さえ出来る。

こうした中で、スタール夫人が現われる。フランスの財務総監として革命前後に活躍したスイスの銀行家ネッケルの娘、スタール夫人は、『文学論』(一八〇〇)、小説『デルフィーヌ』(一八〇二)、『コリンヌ』(一八〇五)の刊行、そして一連の発言や行動からナポレオンにうとまれパリから遠ざけられて、父の祖国スイスのコペを拠点に活動していたが、一八〇七年二月二八日<sup>8</sup>、ウィーンにやつて来た。それは、新しいドイツとドイツ人を論じながら反ナポレオンの意図もうかがえる『ドイツ論』(一八一三年ロンドンで刊行)の準備のためだったが、同時に、二年前ヴェネツィア

で出会ったアイルランド系オーストリア人、オドネル伯爵のためでもあった。しかし、若い伯爵が選んだのは一四才年上のスタール夫人ではなく、結局リーニユ公の孫娘クリスチーナになった。<sup>9</sup> 失意のスタール夫人は、一八〇八年五月二二日、ウィーンを離れることになるだろう。

ウィーンに着いてすぐリーニユ公の関心を引いた彼女は、意気投合した彼の館の常連になる。自分を▲娘のように扱って▽くれる彼にすっかり魅了されたのである。▲年を取っているのは残念だけど、この世代の人にどうしようもなく惹かれる▽と言い、▲ゲルマンの海の中のフランスの島▽<sup>10</sup>のような彼に、『ドイツ論』で助言をもらい、伯爵のことで慰められる。彼女が、一七九五年刊行で全三四巻の『軍事的、文学的、心情的雑纂』から選りすぐった『元帥リーニユ公の書簡と断想集』刊行を提案したのは、いわばそのお返しであった。

その『刊行者の序文』の中でスタール夫人は、リーニユ公の長い作家としての業績にふれ、ルソー、ヴォルテールとの対話や自らの生涯の記録を▲三〇年前のサロンの会話のスタイル▽で綴っていること、▲体系の専制主義▽のないその自由さ、<sup>スポンタネイテ</sup>率直さ、<sup>ソプレス</sup>こだわりのなさ、特に逆境に置かれた際に慎みと品格を示していることを高く評価している。それは、効率主義と計算づくの行動、権威主義的な新時代の行動規範、まさに▲投げやりな面が一切なくすべて計画的<sup>11</sup>だとリーニユ公が評したナポレオンの成功に見られるものと対極にあったと言えるだろう。

オーストリアの著名な元帥リーニユ公は、こうして一躍有名な作家となった。一八〇九年、フランス語版が七版を数え、英・独・露・伊語版が続いた。その原動力は▲男―女▽という稀有な存在、スタール夫人である。彼女の中の、▲「彼」にはとてもエスプリがあり、「彼女」には想像力がある。「彼」は思想家で「彼女」は詩人である。<sup>12</sup> etc.▽そういう性を越えた強烈な個性、▲女帝エカテリーナともいべき人▽に、▲ポチョムキンともいべき自分▽<sup>13</sup>はつき

従う。叱咤激励しながら自分を作家にしてくれた彼女に感謝し、ナポレオンも意識しつつ彼は言う。

国王を作るのは簡単です。しかしあなただけが一言で、あるいは一行で多くの名声を作り出せます<sup>14</sup>。

一八〇八年五月二日ウィーンを離れたスタール夫人に、リーニユ公は手紙を書いている。

あなたは多分歌っています。《私はフランスにいるのか、アジアにいるのか、（インドの）ゴルコンダか、祖国か、はたまたコペカフィラデルフィアか？》大切な、素晴らしい女性、あなたはどこにいますか？ヨーロッパがあなたには小さすぎるのは分かっています。しかし、実際アメリカもそうです<sup>15</sup>。

リーニユ公らしい明るく軽い調子だが、しかし、彼女にしてみればナポレオンの執拗な追及が終わらなくて定住先が決まらず、新大陸移住さえ真剣に考えていたのは事実のようである。

この二年後も状況は同じで、自分が彼女を忘れるような人間だと考えるなら、《あなたは人でなし》だとその手紙に書き、そして、

他の人たちがあなたを忘れることを望みますが、そうはいかないようです。

さすがのリーニユ公も、彼女に対するナポレオンの迫害が終わらない、事態の深刻さを認識しない訳にはいかなかったのである。<sup>(16)</sup>

スタール夫人との文通が続いていた一八〇九年から一〇年、それと並行して、皇帝ナポレオンの、オーストリア皇女マリルイーズとの再婚の話題が『回想録』に見られる。彼はそれに賛成する。この話題を旧友ナルボンヌへの手紙に書いたが、それを一週間前ナルボンヌがフーシェに転送したので、ナポレオンも読んだかもしれない、というのである。

そうなたらヨーロッパに何という変化がおきるだろう！人類にとって何という幸せだろう！そしてこれまで何も建設せず、すべてを破壊してきたこの男が、真のカエサルたちとその最後の末裔を通して縁戚関係になるなら、その時その建物は安定するだろう。これまでそれは砂の上に建っていたのである。<sup>(17)</sup>

この結婚が近づいた一八一〇年二月にもこれとほぼ同じ話を同じ方で書き、さらにこの結婚を認めた父親のオーストリア皇帝の栄光をたたえる。なぜなら△国の幸せ、帝室の存続、財政の立て直し、そして永遠の平和のため、その当然な恨みを乗り越えるのは、もつとも大きな勝利だからである。▽

しかし一方で、ナポレオンを評価することも忘れない。講和条約締結前、シェーンブルン宮殿でオーストリア帝室の終焉を主張する四人の元帥たちを前に、少し考えた後ナポレオンは△いいや、私はこの帝国が続くことを望む。それには理由がある▽、と言ったというのである。<sup>(18)</sup>

ジョゼフィーヌと離婚したナポレオンは、こうしてオーストリア皇女マリルイーゼと一八一〇年四月に結婚し、一年後には世継ぎの男子、後のナポレオン二世を授かる。このことでリーニユ公はメッテルニヒを讃える。<sup>(19)</sup>

もちろんナポレオンの行動に全面的に賛同している訳ではない。ナポレオンが不幸にした者の不幸でなく、彼の幸せこそ嘆かわしい。あれほどのファンテジを自らに与えることはその栄光を減じる、なぜオランダを併合し、スペインを苦しめるのか？<sup>(20)</sup>これは一八一〇年七月九日、四年近くオランダ王だったが王位を解かれた後、ひとりオーストリアにやって来たナポレオンの弟ルイに会った時、リーニユ公が感じた疑問である。

前述したフィヒテは、一八一三年、『ナポレオンの肖像』と題した講義の冒頭で「フランス人の皇帝」に異議申し立てをし、<sup>(21)</sup>彼はフランス人ではない、<sup>(21)</sup>と切り、もしそうなら、<sup>(21)</sup>社会的な考え、他者の意見の尊重<sup>(21)</sup>が現われていたはずだと言った。

かつてのリーニユ公もナポレオンについて、<sup>(22)</sup>ローマ人ならその中から奴隷さえ選ばなかったコルシカ人<sup>(22)</sup>、<sup>(22)</sup>「オーストリア人の」私以上に外国人<sup>(22)</sup>のナポレオンがフランスの指導者と称していると評したが、今やそれは過去の話となる。

一八一〇年七月、彼はこう記す。

すべてにおいて何と並はずれた男！彼のしている偉大なこと、時に良いことのため、多くのことで彼を許さねばならない。<sup>(22)</sup>

さらにロシアとの決戦が予想され、それにオーストリアの参加も予想された一八一一年五月には、こう書いているのである。

この男を愛する義務はない。しかし、パリ、ローマ、トリノ、ザクセン、アントワープを同時に美しくし、物理的にも精神的にも世界君主国を所有する勝利者をどうして愛さないでいられようか？<sup>(23)</sup>

#### 注

- (1) Prince Charles-Joseph de Ligne, *op.cit.*, H.Champion, 2000, p.300.
- (2) 前年の一八〇六年七月、ナポレオンは神聖ローマ帝国を解体し、自らが「プロテクトゥール盟主」となってライン同盟を創設した。「ザクセン王」もその占領地統治策に従って作ったものである。
- (3) ドイツ国境に近い、現チェコ共和国の温泉保養地。娘クリスティーヌが嫁いだクラリー公の居城があった。
- (4) Ph.Mansel, *op.cit.*, p.224. 参照。
- (5) 以下は Prince Charles-Joseph de Ligne, *op.cit.*, H.Champion, pp.300-302.
- (6) Prince de Ligne, *Mémoires, lettres et pensées*, F.Bourin, 1990, pp.670-671.
- (7) Ph.Mansel, *op.cit.*, p.229. 同引用。
- (8) この日付については Prince de Ligne, *Lettres et pensées du Prince de Ligne*, Tallandier, 1989, p.64. 注76参照。
- (9) 二人は一八一一年、結婚することになる。
- (10) Prince de Ligne, *op.cit.*, Tallandier, p.44. 一八一〇年前後から、ウィーンでもドイツ語の使用がサロンでも普通で、フランス語のそれはいわば特別なものになったという。

- (11) Marthe Ouhé, *Le Prince de Ligne*, Hachette, 1926, p.145. 引用。
- (12) Prince de Ligne, *op.cit.*, Tallandier, p.46. 引用。
- (13) Mansel, *op.cit.* p.234. 参照
- (14) Prince de Ligne, *op.cit.*, F.Bourin, p.621.
- (15) *Ibid.*, p.617.
- (16) *Ibid.*, p.619.
- (17) Prince Charles-Joseph de Ligne, *op.cit.*, H.Champion, p.346.
- (18) *Ibid.*, p.353.
- (19) *Ibid.*, p.359.
- (20) *Ibid.*, p.361.
- (21) J.Barni, *Les Martyrs de la libre pensée*, Genève, 1862, pp.298-304. (フイヒテの講義『ナポレオンの肖像』仏訳を収録。)
- (22) *Op.cit.*, p.364.
- (23) *Ibid.*, p.391.

4.

一八一二年六月二三日、ロシアに対して宣戦布告がなされ、ただちにニエメン河<sup>①</sup>という「ルビコン」が渡られ、第二次仏露戦争が始まった。九月一日、ナポレオン軍はモスクワに入るが、敵の市街地焼滅作戦などでその一カ月後には撤退を余儀なくされた上、長い退却路はコサック兵の襲撃、特に厳しい「冬將軍」の襲来によって妨害され、苦

しめられたことは良く知られている。

以下はその後書かれたと思われる、リーニユ公からナポレオンに宛てた手紙である。<sup>(2)</sup>

陛下、

皇帝閣下の栄光をさらに増すため、様々な不運こそ欠けていたものでした。こうした不運なるものは、陛下のごとく偉大なる指導者には想定およばぬものであり、陛下の勝ち誇れし軍の計画を阻止せんと、古きツァーの宮殿を焼き払い、二〇万の住民を獣のごとく森に放ち、その広大なる帝国を永久に破壊する、かくなる敵の野蛮さはお考えにも及ばぬものでございました。

ルイ一四世によるフランシュ・コンテの征服<sup>(3)</sup>によって、陛下、都から六〇里<sup>(4)</sup>の所で祝賀に至りました。陛下は、都から八〇〇里<sup>(5)</sup>のクレムリンの壁にその旗を掲げられ、そこから、陛下にとり名誉ある、かつアレクサンドルも受け入れられる和平の条件を出されました。勝利の女神の手により、かくも遙かに導かれていらした陛下は、度量大きく人間らしい心の幻想にだまされ、大自然の力にかなわず、その計画を止めざるを得ませんでした。陛下には、敵の勝利を抑えることしかありませんでしたが、必要な撤退の行軍を妨げるすべての部隊を追い払い、ニエメンの岸まで後退しながら戦い、極めて厳しい季節の中、通行不能な道路、沼沢で命を落とし、大砲を放棄せざるを得なかった者たちを嘆くしかありませんでした。

陛下の軍事の才が過ちを犯すなど、あり得ませんでした。しかしながら、健全な考え方に基づく計算、そうい

う考え方から、あるキリスト教国に想定された人間性が仇となり、しばらく陛下の成功の流れは中断したのであり、その再開は、陛下、春でございましょう。陛下の帝国がロシアの帝国を倒し尽くすに多大な努力が必要だと言うつもりなどございません。熱情の命ずるところ、その必要などございません。勇猛果敢にして忠実なる陛下の人民の声を伝える者として、私どもは、その栄光のため陛下がなさつて来られたすべてに人民の名においてこれに感謝し、その栄光をいや増すためこれからなさることを予期して、これを嬉しく思うものでございます。それは遂にはヨーロッパ中に平和をもたらすものであり、陛下が企図されたかくも輝かしき四たびの戦いの、ただひとつの目的でありましたが、その戦いは天才によつて指導され、力によつて実行され、勝利によつて世界の果てまで飾ったのでございます。

ここで使われている「私ども」(nous)「は、具体的に誰かを指すというより、「陛下」に宛てた手紙の中で、その意見が他者と共有されていることも示す謙譲の語 (Juliel de modestie) だと思われる。

メッセージは明確であろう。ナポレオンの軍事行動とその置かれた状況が分析、叙述され、それは「侵略」でなく「平和」のためであり、「野蛮」に対する「人間性」と文明の観点が強調され、不可抗力な要素である気候にもふれるのである。

ナポレオンのロシア遠征の容認・支持の背景には、もちろん、皇女マリールーズがナポレオン一世妃になって以来の政治状況、オーストリアが今やフランスの同盟国であり、ロシア遠征に参加したドイツ諸国などからなる「多国籍軍」の中で、特にオーストリアは有力メンバーだったことを忘れてはならないだろう。

## 注

- (1) 第一次仏露戦争後のティルジットの和約（一八〇七）で、ワルシャワ大公国（その和約で成立したフランス衛星国）とロシアの国境（現リトアニア・ロシア国境）を流れる河。
- (2) *Annales du Prince de Ligne*, t. VII (n°25), 1926. より抜粋。（Prince de Ligne, op.cit., F. Bourin, 1989, pp.675-6.）
- (3) ドール市は、一六三六年のコンデ公の攻撃の後、一六七四年のルイ一四世の攻撃に遂に降伏し、その四年後には、この町の属するフランシュ・コンテ（現地域圏名）がフランスに併合された。
- (4) 一里<sup>リュイ</sup>は約四km。

## おわりに

一八〇三年から一八一二年の晩年の約一〇年、リーニユ公はナポレオンに強い関心を示し、結局、直接話すことはなかったが、その会見に居合わせた人からその発言を聞き取ったり、近くから一挙手一投足を観察して記録したりした。まずフランスによるベロイユ城他の土地財産の接収とリーニユ公個人の「亡命」に端を発する、当然な個人的恨みの感情があり、ついで、フランス革命軍との戦いで戦死させられた最愛の長男シャルルの思い出の一方で、ナポレオン軍将校としてブリュッセルに入る次男ルイの行動に「憤激」しつつ、ベロイユ城保全を考えてそれを容認せざるを得ない苦しい状況があった。

ウィーンの社交界の人々と同じく「オーケルコルシカの鬼」に厳しい目を向けるだけでなく、小貴族出の「自分以上に外国人」の男がフランスの皇帝にまで昇りつめたことに、古い大貴族の出で、老いてなお軍人としての誇りを持つプリ

ンスが、エスプリを駆使した表現では解消しきれない個人的な利害も絡んで、軽蔑や嫉妬も含めた複雑な感情が、その言葉の端々に垣間見えても、なんら不思議はないであろう。

しかし、そうした感情は、側近タレーランとのやり取りを通してナポレオンという人物の理解を深め、なによりナポレオンの矢継ぎ早な連戦連勝が止まらないのを目撃するにつれ、消えることはなくても次第に薄れていったと思われる。軍人としてそれまでもつとも評価していたフリードリヒ大王以上に、晩年の軍人リーニユ公が、軍事的才能を持つ戦術家・戦略家と考えざるを得ない、戦場の状況に即応した駆け引きや戦術転換のすばやさ、書物を通してあるいは実戦を通して学んだと思われる電撃作戦や迂回作戦など作戦の豊富さが想像以上であったのである。

ナポレオンの専制的、権威主義的な不遜な態度や、効率一辺倒の実利主義が、古き良き伝統のフランスの教養とそのリベラリズムを受け継ぐリーニユ公に不快でないはずはなく、そのこともあり、自分の著作をまとめて出版し、作家に押し上げてくれたこともあって、彼はスタール夫人に接近した。その反専制的、自由主義的思想への共鳴は明らかである。

大きな一つの転機は、オーストリアの皇女マリルリーズとナポレオンの結婚であろう。これをきっかけに、リーニユ公は、上述したようなこれまでの様々な経緯を越え、ナポレオンとその帝国を、オーストリア帝国の友好・協調路線との関連で意識し、支持する点からも評価することになったのである。モスクワから撤退せざるを得なくなったナポレオンに宛てたリーニユ公の手紙は、そうした彼の個人的な感情を越えた意識と状況を如実に反映していると思われる。

しかし、そういう政治的な意識や状況が存在したのが事実であるとしても、カリスマ性を持って自らを皇帝にした

不世出の人物に対するリーニユ公の敬意が、その軍人としての経歴から出発した敬意である事は否定できない。その意味で今後、すでに本論で触れたように、<sup>(1)</sup>特にリーニユ公の研究を進める上で、その著『わが七年戦争従軍記 (*Mon Journal de la guerre de Sept Ans*)』[一七九五年刊行開始の全集、『軍事的、文学的、心情的雑纂 (*Les mélanges militaires, littéraires et sentimentales*)』に所収]や、『軍事に関する偏見と幻想 (*Préjugés et Fantaisies militaires*)』(二七七四刊行)を中心に、軍人リーニユ公の経歴と思想を考察することを今後の課題としたい。

#### 注

(1) 本稿四ページ参照。

